

おうみじょうふ あいぞ
近江上布と藍染め

湖東一円

周辺の
みどころ

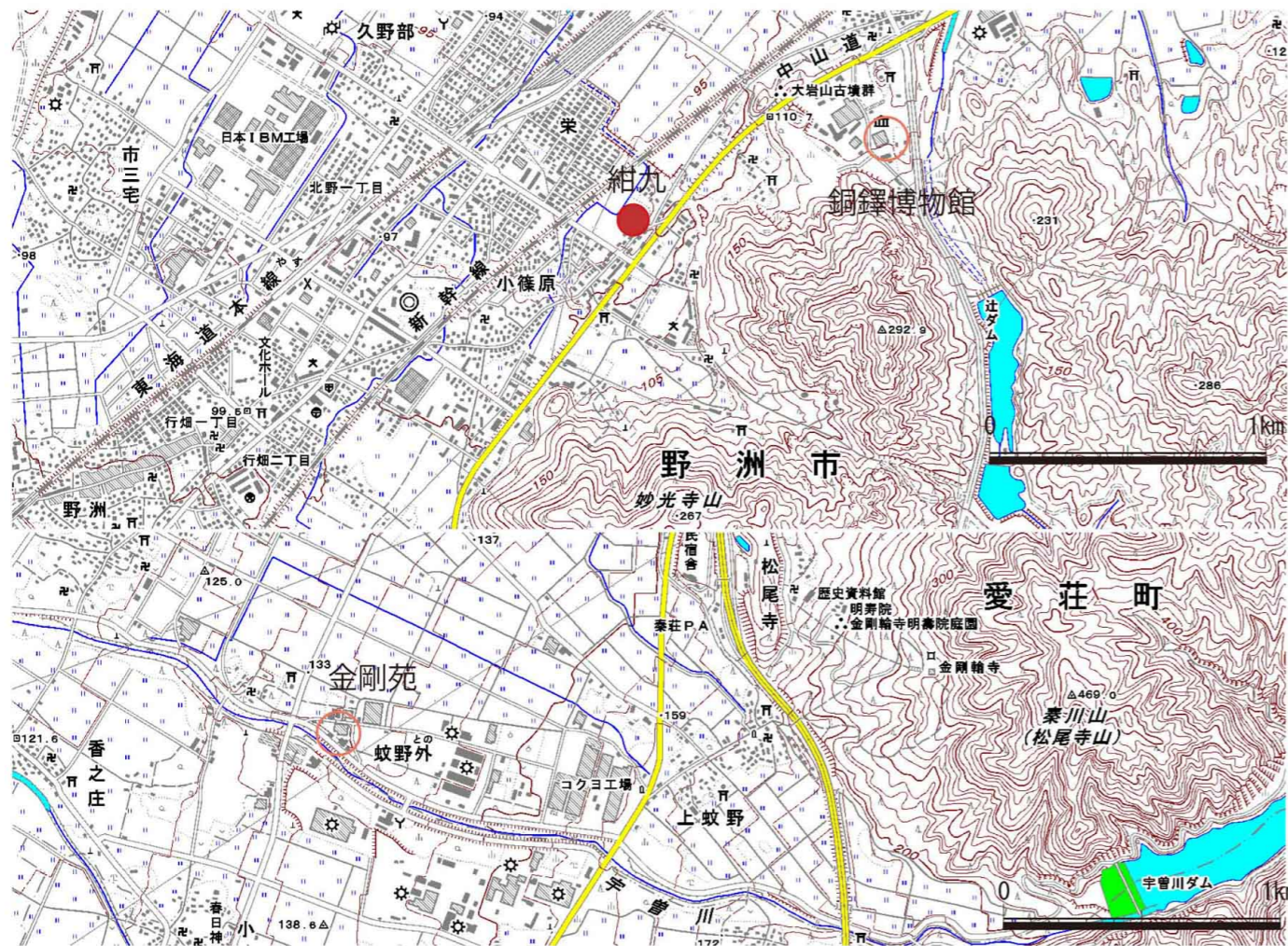
金剛輪寺：湖東三山の一つに数えられる天台宗の寺院。本堂は、鎌倉時代の代表的な建造物として国宝に、庭園は近江路随一といわれ、国の名勝に指定されている。境内にはその他にも建造物や仏像など指定された文化財が多くある。

愛荘町立歴史文化博物館：金剛輪寺の参道沿いにある博物館。金剛輪寺梵鐘（滋賀県指定有形文化財）など愛荘町に関する展示がされている。

銅鐸博物館（野洲市歴史民俗博物館）：大岩山から出土した銅鐸に関する資料を中心に野洲市に関する歴史や民俗を楽しみながら学ぶことができる。復元された銅鐸を実際に触ったり鳴らすことができる。また、隣接する工房では、まが玉作りなども体験できる。



紅葉の時期の金剛輪寺



[アクセス]

- 手おりの里 金剛苑
 愛知郡愛荘町蚊野外514
 JR稲枝駅または能登川駅から車で約20分
- 本藍染「紺九」
 野洲市小篠原1603
 JR野洲駅から西へ徒歩約20分
 ※見学の際は事前に連絡を
 Tel&fax:077-587-0735

[もっと詳しく知りたいひとへの案内]
 (関連文献/関連施設)

- 秦荘町教育委員会『今に伝わる近江上布の織りと染め 一近江上布制作の手引き一』2004年
- 滋賀県無形文化財保存会『滋賀県指定無形文化財調査報告 第二冊』1971年



「紺九」の藍染

天然繊維の製品は近江の主要産物であった。その代表格が、近江上布と藍染めである。

上布とは、麻を原料とした織物のことである。近江の上布は、中世にはすでに特産品としての地位を確立し、江戸時代には彦根藩による生産の奨励や近江商人の活躍により全国へと広められていった。藍染めは我が国の伝統的な染色技術であり、天然の蓼藍を原料に行われるものを「本藍染」と呼んでいる。野洲市にある工房「紺九」の4代目森義男氏は、この「本藍染」の伝統的な技術を守り続け、次世代への継承活動をされておられる。

近江上布と本藍染めは、優れた伝統技術と鈴鹿山系から流れ出る豊富で良質の伏流水により培われた産物と言える。





近江上布（櫛押しの様子）



近江上布（織りの様子）

近江上布と藍染め

所在地 湖東一円

近江上布

上布とは、麻を原料とした織物で、日本での麻織物の歴史は先史時代までさかのぼることが考古遺物から知られている。近江上布の歴史は、鎌倉時代に京都から職人が移り住んで麻織物の技術を伝えたことに始まるとされている。かつては、「高宮布」などと呼ばれ、現在の彦根市高宮に流通の中心があったことによるとされる。

宝徳元年（1449）に近江国高島郡と越前国敦賀の神官が京都吉田家への土産として「高島十端」・「高宮五端」を持ってきたことが記されており、この記述が近江上布の最古の記録とされている。近世には、享保19年（1734）に刊行された『近江輿地志略』によると、高宮で生産された上布は「細緻絹のごとし」「当国の産を

生^{きびら}平の第一とす」と表されている。生平とは、漂白や染織などの加工を施していない麻糸を織ったもので、ベージュっぽい色をした無地の麻織物で、近江上布では生平として生産されることが多かったとされる。

また、野洲川の川原では高宮などから運ばれた麻布を漂白する^{さら}晒しが、川原一面を白くして行われていた。最盛期の寛保年間（1741～43）には、村内戸数300戸のうち130戸が布曝^{ふばく}業を営んでいたとされ、明治以後は、薬品晒の発達等により衰退していた。

江戸時代には、彦根藩による生産の奨励や近江商人の「^{のこぎり}鋸商法」と呼ばれる、製品を他国で商い、その帰りに原料を仕入れて持ち帰ると



いう商法で流通量を増やしていった。さらには「櫛^{くし}押し^{かすり}紺」に代表される染めの技術が大きく進歩し、近江上布独特の上品な紺模様が生産され、技術革新がなされていく。昭和52年には国から伝統的工芸品としての指定を受けている。

藍染め

藍染めの歴史は古く、奈良時代には既に日本に技術が存在したとされている。

9世紀に前半に編纂された養老令の注釈書である『令集解』のなかに、藍染四戸が近江に置かれていたと記されており、近江の藍染めの歴史は、奈良時代までさかのぼるとされている。その後の歴史の変遷は明らかではないが、藍染め製品の需要は戦後ますます少なくなり、伝統的な藍染めの職人やその技法は消滅しようとしていた。

そのなかで戦中戦後と伝統的な技術を守りぬいた職人がいた。現在、野洲市で「紺九」という屋号をもつ紺屋の森家である。森家は、明治



「紺九」のハンカチ染



藍の華咲く藍壺

3年（1870）に初代九蔵氏が良質の地下水がある三上山の麓で藍染めを創業したことに始まり、現在は4代目の義男氏が当主として活躍されている。森家では、藍の栽培から、「すくも」作り、藍建て、藍染めまでのすべての工程を行っている。天然原料だけを使用する本藍染の技術を保持されておられ、永年の豊富な経験と伝統を培っている。紙などを染める本藍染の技術は、書画の文化財修理にとって欠くことのできない技術でもあり、伝統的な本藍染を行う人は希少になっていることから、森義男氏は国の選定保存技術保持者として選定され、保存継承が図られている。